現代家族における高齢者介護

―親の介護・看護者の状況を中心に―

菊池　真弓
（いわき明星大学）

Care for the Aged of the Contemporary Family
Mayumi KIKUCHI

本稿は、現代家族の高齢者介護に着目しながら、内閣府の実施した「高齢者介護に関する世論調査」における意識調査の結果と「全国調査『戦後日本の家族の歩み』」（略称NFRJ-S01 調査）における親（回答者の父親・母親、配偶者の父親・母親）の介護・看護者の実態調査を中心に分析・考察を加えた。

現代の高齢者介護の意識と実態の特徴についてまとめてみると、男性の場合は意識的にも実態的にも身近な「配偶者」、女性の場合は意識的に血縁関係にある「娘」、実態的に「長男（夫婦）」が主な担い手であることが浮き彫りになった。

わが国の高齢者介護は、私的介護から公的介護へと移行しているとはいえ、現段階においても私的介護（特に女性）への依存度が強いことが考察できた。

キーワード：家族の介護・看護の変化、親の介護・看護者

１．はじめに

厚生労働省老健局長の私的研究会である高齢者介護研究会の「2015 年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～」では、「戦後のベビーブーム世代」が 65 歳以上に到達する 2015 年までの実現に向けて、今後の高齢者介護の課題を提示している[(1)]。さらには、現在厚生労働省の寝たきりや認知症の高齢者の将来推計等で予測されており、2020 年には寝たきりや認知症の高齢者がともに 200 万人を超えるものとされている。このようにわが国の高齢者介護の問題は、今後ますます深刻化して行く可能性が考えられる。

そこで、本稿のテーマであるわが国の高齢者介護と家族の状況を考えてみると、まず安達正嗣[(2)]が述べるように「家族周期の変化」、「家族サイズの小型化」、「家族機能の外部化」、「女性のライフスタイルの変化」、「高齢期の家族ライフスタイルの多様化」といった近代における家族の変化と要介護の高齢者への家庭介護との関連性が指摘できる。そこには、夫婦で過ごす高齢期とそれに伴う介護期間の長期化、少子化などきょうだい数の減少傾向から予測される実父母と義父母の４人の介護、高齢者介護における家族機能の外部化、依然として女性を介護役割に固定している社会的背景、夫婦のみやひとり暮らし高齢者の介護問題が浮き彫りとなるであろう。そして、袖井孝子[(3)]は、在宅介護者の大多数が女性であり、しかもかなりの高齢であること、高齢者世帯における小家族化、核家族化の傾向は、家庭内に介護補助者のいない世帯を増加させており、介護者の負担がいっそう増すことなどを指摘している。また、清水浩昭[(4)]は、一般的動向としてわが国の高齢者扶養

は私的扶養から公的扶養へと移行するとされているが、現段階においても私的扶養への依存度が強いことから高齢者虐待と老老介護の問題を指摘している。こうした日本における高齢者介護の過重の負担が、高齢者虐待という悲劇の発生にもつながっているとも考えられる。さらには、大久保孝治・杉山圭子(5)の実証研究が示すように、双方の親を介護するといった「双系化」を視野にいれた高齢者介護のあり方も今後の課題となるであろう。

以上のような現代家族の高齢者介護に着目しながら、本稿では、内閣府の実施した「高齢者介護に関する世論調査」における意識調査の結果と「全国調査『戦後日本の家族の歩み』」（略称 NFRJ-S01 調査）における親（回答者の父親・母親、配偶者の父親・母親）の介護・看護者の実態調査を中心に分析・考察を加えながら、現代家族の介護・看護の変化とその特徴を明らかにすることにしたい。

２．わが国における高齢者介護の意識

ここでは、20 歳以上の男女を対象に実施した内閣府「高齢者介護に関する世論調査」（平成 15 年）を中心に、わが国の高齢者介護に対する意識を明らかにするために分析・考察を試みることにした【図１～図２参照】。

本調査では、仮に自分自身が老後に寝たきりや認知症になり、介護が必要となった場合に、自宅で介護されるとしたら、どのような形の介護をされたいかを尋ねたところ、「家族の介護を中心とし、ホームヘルパーなど外部の者も利用したい」（41.8%）、「ホームヘルパーなど外部の者の介護を中心とし、あわせて家族による介護を受けたい」(31.5%)、「家族だけに介護されたい」(12.1%)、「ホームヘルパーなど外部の者だけに介護されたい」(6.8%）の順となっている。これらの結果を平成７年の同調査結果と比較してみると、「家族だけに介護されたい」（25.0%→12.1%）と答えた者の割合が低下し、一方で「ホームヘルパーなど外部の者の介護を中心とし、あわせて家族による介護を受けたい」（21.5%→31.5%）と答えた者の割合が上昇している。

また、性別にみると、男性は「家族だけに介護されたい」、「家族の介護を中心とし、ホームヘルパーなど外部の者も利用したい」、女性は「ホームヘルパーなど外部の者の介護を中心とし、あわせて家族による介護を受けたい」と答えた者の割合がそれぞれ高くなっている。このように、現在の高齢者介護に対する意識は、徐々に家族介護から公的介護へと移行しているとはいえ、いまだそこには男女の差があることが考察できる。

では、どうして高齢者介護を望む相手の違いや男女の差が生じてくるのであろうか。内閣府の同調査において「家族だけに介護されたい」と答えた者にその理由を尋ねたところ、「他人の世話になるのはいやだから」（51.0%）、「他人に家庭に入ってきてほしくないから」（44.3%）、「家族の者だけで十分な介護ができるから」（36.3%）等を挙げた者の割合が高くなっている。

また、その場合、家族の中では主として誰に身の回りの世話を頼むつもりか尋ねたところ、「配偶者」（60.7%）、「娘」（17.3%）、「息子」（7.2%）、「嫁」（6.0%）等の順となっている【図１】。これらの結果を平成７年の同調査と比較すると、「配偶者」（54.8%→60.7%）と答えた者の割合が上昇し、「嫁」（12.1%→6.0%）と答えた者の割合が低下している。さらに性別にみると、男性は「配偶者」（男性：76.0%，女性：36.1%）、女性は「娘」（男性：4.5%，女性：38.0%）と答えた割合がそれぞれ高くなっている。これらの結果からは、家族以外の

他人に「世話になりたくない」、「家庭に入ってきてほしくない」等といった外部機能への抵抗が読み取れる。だからこそ、介護・看護の担い手を、男性の場合は身近な配偶者であり、女性の場合は嫁でなく血縁関係にある娘を挙げると考察できる。

一方で「家族の介護を中心とし、ホームヘルパーなど外部の者も利用したい」、「ホームヘルパーなど外部の者の介護を中心とし、あわせて家族による介護を受けたい」と答えた者にその理由を尋ねたところ、「家族の肉体的負担を減らすため」(71.9%)、「家族の精神的負担を減らすため」(61.6%)、「家族は仕事などがあり、介護が十分な時間がとれないため」（24.5%）等の順となっている。これらの結果を平成７年の同調査と比較してみると、「家族の肉体的負担を減らすため」(64.6%→71.9%)、「家族の精神的負担を減らすため」(54.1%→61.6%）を挙げた者の割合が上昇し、「家族は仕事などがあり、介護が十分な時間がとれないため」(30.7%→24.5%）などを挙げた者の割合が低下している。

また、家族の中では主として誰に身の回りの世話を頼むつもりか尋ねたところ、「配偶者」（57.3%)、「娘」(19.6%)、「息子」(5.3%)、「嫁」(5.1%）等となっている【図２】。これらを平成７年の同調査結果と比較すると、「配偶者」(50.9%→57.3%）と答えた者の割合が上昇している。さらに性別にみると、男性は「配偶者」(男性：78.8%，女性：42.1%)、女性は「娘」(男性：5.0%，女性：29.9%）と答えた割合がそれぞれ高くなっている。これらの結果からは、家族の「肉体的負担」、「精神的負担」の軽減としての外部機能を活用していきたいといった意識が読み取れる。しかし、介護・看護の担い手は、「家族だけに介護されたい」と答えた者と同様な結果で、男性の場合は身近な配偶者が中心であり、女性の場合は血縁関係にある娘を希望している。

以上のことから全体的な傾向をみると、現在の高齢者介護に対する意識は、徐々に家族介護から公的介護へと移行している。それは、前述したような現代における高齢者介護と家族の状況からも考察できるように、家族の肉体的負担、精神的負担の軽減していくための外部機能の活用を意識しているといえる。とはいえ、いまだに家族以外の他人の世話になりたくない等といった外部機能への抵抗があるといえる。さらには、本調査から明らかになったことは、高齢者介護に対する意識は、徐々に外部機能の活用を考えつつも、実際の望む介護・看護の担い手は、男性の場合は身近な配偶者であり、女性の場合は血縁関係にある娘なのである。とすれば、現在の高齢者介護の状況はどのようになっているのであろうか。女性たちにさらなる負担とはならないのであろうか。

３．回答者の父親・母親における介護・看護者の状況

ここでは、NFRJ-S01 調査の問 41 と回答者の「長女か否か」、「男のきょうだいの有無」、「出生コーホート」を中心に、回答者の両親の主な介護・看護者の状況について分析・考察を試みることにした。問 41 の付問１から要介護・看護経験があったそれぞれの親の中心的な介護・看護者を概観してみると、両親ともに「非該当」の割合が約６割と最も高いといえる[(6)]。そこで、以下では非該当および無回答を除いた上で分析を行うこととする【図 3-1～図 5-2 参照】。

（１）きょうだいの続柄にみる回答者の父親・母親の中心的な介護・看護者

まず、全体的に両親の中心的な介護・看護者をみると、父親の場合では「配偶者〔＝あ

図１　家族の中では誰に介護を望むか（家族だけに介護されたいと回答）

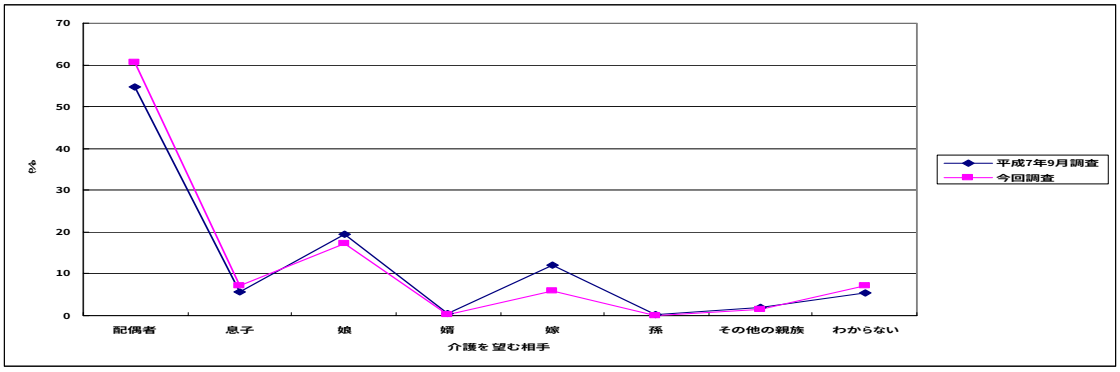


図２　家族の中では誰に介護を望むか（外部の者も利用したい等と回答）

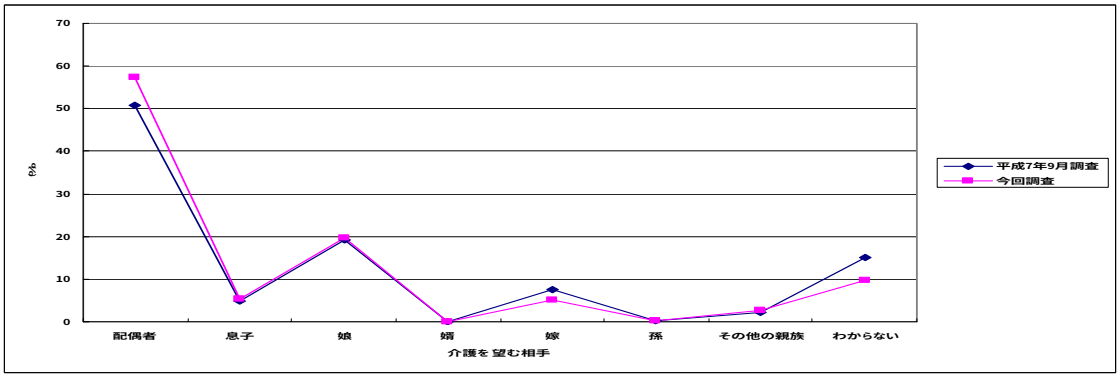


図 3-1　長女か否か×中心的な介護・看護者（回答者の父親）

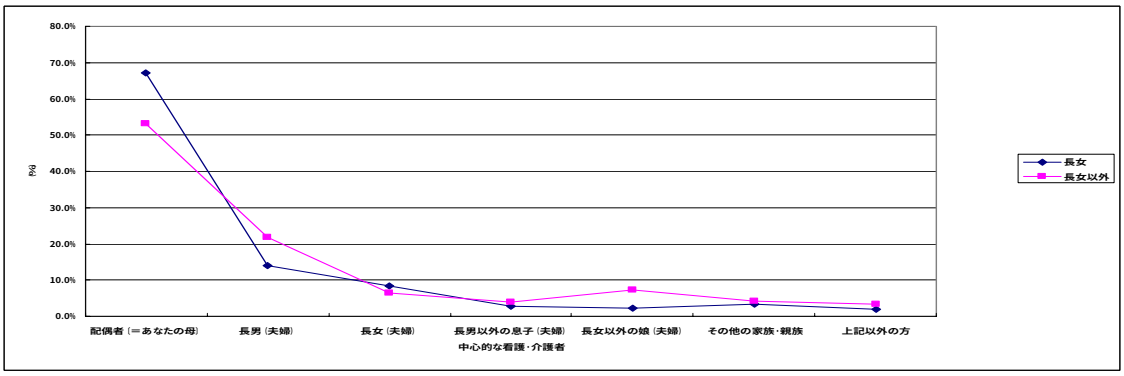


図 3-2　長女か否か×中心的な介護・看護者（回答者の母親）

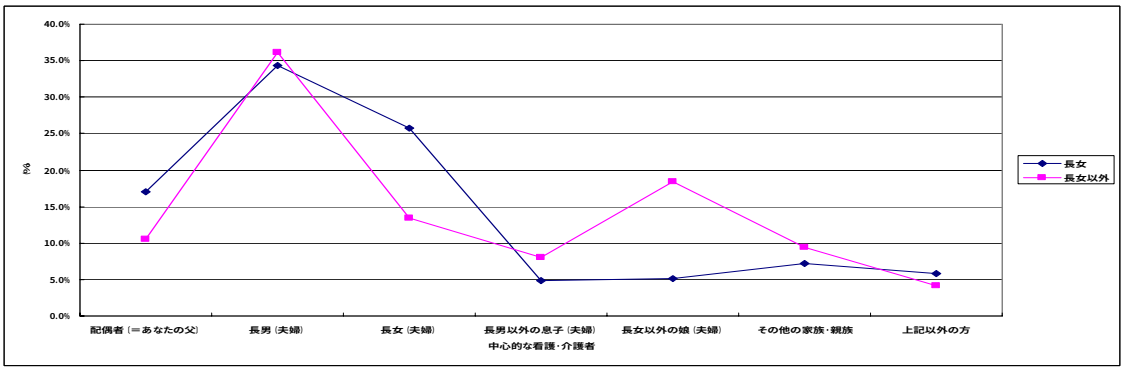


図 4-1　成人した男のきょうだいの有無×中心的な介護・看護者（回答者の父親）

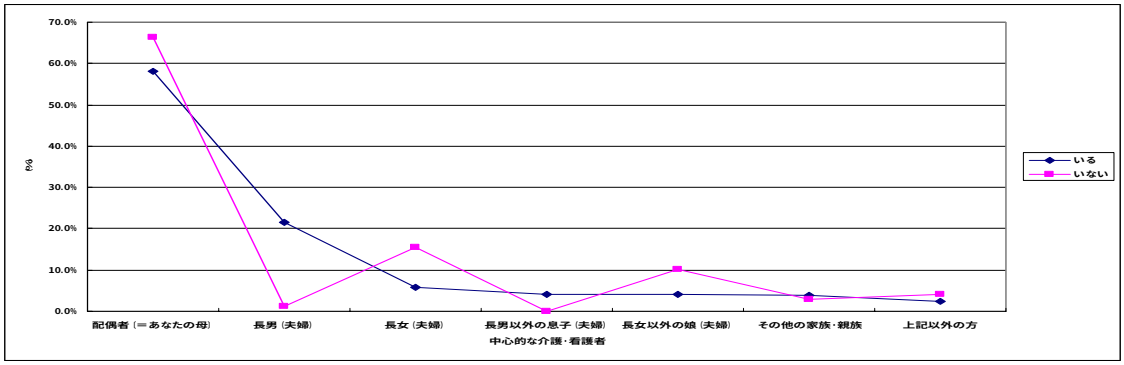


図 4-2　成人した男のきょうだいの有無×中心的な介護・看護者（回答者の母親）

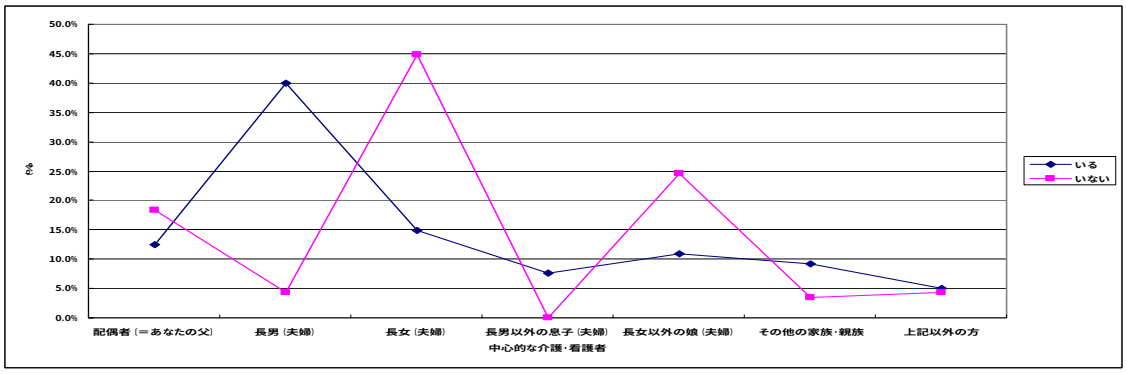


図 5-1　回答者出生コーホート（10 年階級）×中心的な介護・看護者（回答者の父親）

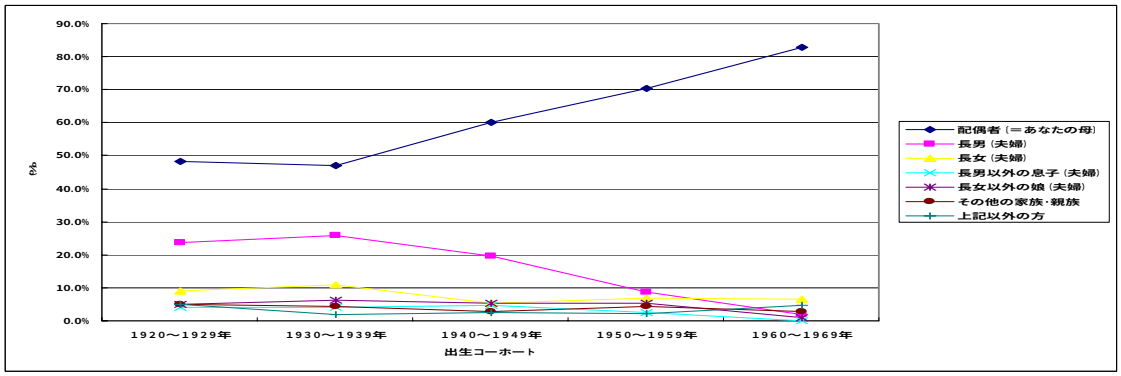
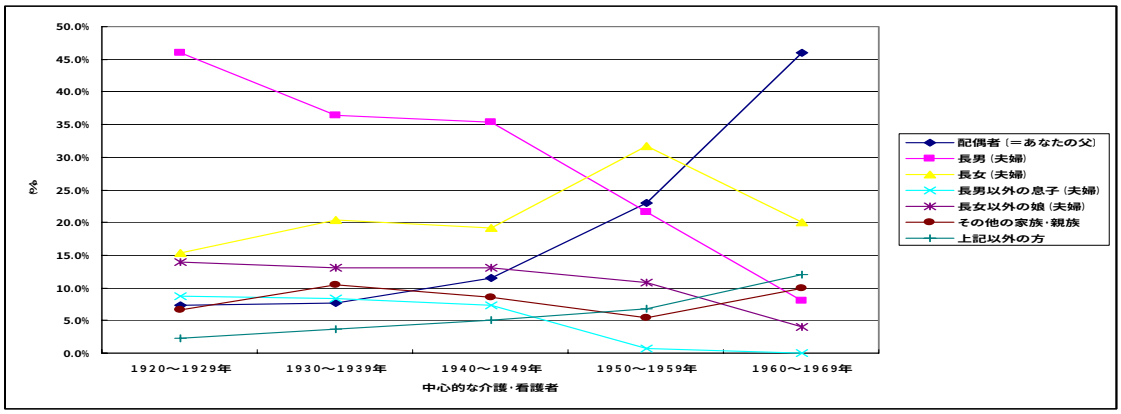


図 5-2　回答者出生コーホート（10 年階級）×中心的な介護・看護者（回答者の母親）



なたの母〕」（59.8%）、「長男（夫婦）」（17.6%）、「長女（夫婦）」（7.5%）等、一方、母親の場合では「長男（夫婦）」（33.6%）、「長女（夫婦）」（21.0%）、「配偶者〔＝あなたの父〕」（13.3%）等の順となっている。このように、父親の介護・看護には約６割の「配偶者〔＝あなたの母〕」が関わっており、母親の介護・看護には「長男（夫婦）」の約３割、「長女（夫婦）」の約２割つまり子ども夫婦（特に長子）が主な介護・看護の担い手となっている。

次に、回答者が長女か否かに注目して父親の中心的な介護・看護者の分析を加えてみると、回答者が「長女」の場合は「配偶者〔＝あなたの母〕」（67.2%）、「長男（夫婦）」（13.9%）等、「長女以外」であっても「配偶者〔＝あなたの母〕」（53.1%）、「長男（夫婦）」（21.8%）等の順に長女で有無は関係なく「配偶者〔＝あなたの母〕」の割合が高くなっている【図3-1】。一方、母親の中心的な介護・看護者をみると、回答者が「長女」の場合は「長男（夫婦）」（34.3%）、「長女（夫婦）」（25.8%）等、「長女以外」の場合は「長男（夫婦）」（36.1%）、「長女以外の娘（夫婦）」（18.4%）等の順に長女で有無は関係なく「長男（夫婦）」の割合が高くなっている【図3-2】。

さらに、回答者の成人した男のきょうだいの有無に注目して父親の中心的な介護・看護者の分析を加えてみると、回答者に男のきょうだいが「いる」場合は「配偶者〔＝あなたの母〕」（58.2%）、「長男（夫婦）」（21.5%）等、「いない」場合は「配偶者〔＝あなたの母〕」（66.3%）、「長女（夫婦）」（15.4%）等の順となっている【図4-1】。一方、母親の中心的な介護・看護者をみると、回答者に男のきょうだいが「いる」場合は「長男（夫婦）」（39.9%）、「長女（夫婦）」（14.8%）等、「いない」場合は「長女（夫婦）」（44.7%）、「長女以外の娘（夫婦）」（24.6%）等の順で割合が高くなっている【図4-2】。

以上のことから、きょうだいの続柄にみた親の中心的な介護・看護者の特徴をまとめてみると、父親の場合は回答者が「長女」で有無、男のきょうだいの有無に関わらず約５～７割の「配偶者〔＝あなたの母〕」が主な介護・看護の担い手となっている。一方、母親の場合は「長女」で有無に関わらず約３～４割の「長男（夫婦）」が主な介護・看護の担い手となっている。また、回答者に男のきょうだいが「いる」場合では、「長男（夫婦）」が約４割、男のきょうだいが「いない」場合は「長女（夫婦）」の約４割が中心的な介護・看護者になっているといえる。

（２）出生コーホートにみる回答者の父親・母親の中心的な介護・看護者

次に、出生コーホート（10年階級）別に両親の中心的な介護・看護者の分析を加えてみると、父親の場合は「1960～69年」（82.9%）、「1950～59年」（70.3%）、「1940～49年」（60.1%）コーホートの約６～８割、「1920～29年」（48.4%）、「1930～39年」（46.9%）コーホートの約５割が「配偶者〔＝あなたの母〕」となっている【図5-1】。続いて「1930～39年」（25.8%）、「1920～29年」（23.8%）、「1940～49年」（19.6%）コーホートでは、「長男（夫婦）」の約２～３割が主な介護・看護の担い手となっている。一方、母親の場合は「1920～29年」（46.0%）、「1930～39年」（36.5%）、「1940～49年」（35.4%）コーホートの約３～４割が「長男（夫婦）」、続いて「1950～59年」（31.8%）コーホートの約３割が「長女（夫婦）」、さらに「1960～69年」（46.0%）コーホートの約４割が「配偶者〔＝あなたの父〕」となっている【図5-2】。

以上のことから、それぞれの親の中心的な介護・看護者の特徴をまとめてみると、父親の場合はどのコーホートにおいても最も「配偶者〔＝あなたの母〕」が多く、続いて「長男（夫婦）」の順である。そしてそれらは、「1940～49年」コーホートを中心に主な介護・看

護の担い手としての「配偶者〔＝あなたの母〕」の割合が高くなっている。一方、母親の場合は「1950～59 年」コーホートから徐々に「長男（夫婦）」から「長女（夫婦）」、「長女（夫婦）」から「配偶者〔＝あなたの父〕」へと中心に主な介護・看護の担い手が変化しているといえる。

４．配偶者（夫）の父親・母親における介護・看護の変化

ここでは、NFRJ-S01 調査の問 43 と回答者の「出生コーホート」、「配偶者が長男か否か」、「配偶者の女のきょうだいの有無」を中心に、配偶者の両親の主な介護・看護者の状況の分析・考察を試みることにした。問 43 の付問１から要介護・看護経験があったそれぞれの親（夫）の中心的な介護・看護者を概観してみると、両親ともに「非該当」の割合が約５割と最も高いといえる[7]。そこで、以下では非該当および無回答を除いた上で分析を行うこととする【図 6-1～図 8-2 参照】。

（１）きょうだいの続柄にみる配偶者（夫）の父親・母親の中心的な介護・看護者

まず、全体的に両親（夫）の中心的な介護・看護者をみると、父親の場合では「配偶者〔＝夫の母〕」（47.9%）、「長男（夫婦）」（31.9%）、「長男以外の息子（夫婦）」（7.5%）等、一方、母親の場合では「長男（夫婦）」（53.9%）、「長男以外の息子（夫婦）」（13.5%）、「配偶者〔＝夫の父〕」（9.8%）等の順となっている。このように、夫の父親の介護・看護には「配偶者〔＝夫の母〕」の約５割と「長男（夫婦）」の約３割が主な介護・看護の担い手として関わっている。一方、夫の母親の介護・看護には「長男（夫婦）」の約５割と「長男以外の息子（夫婦）」の約１割と子ども（息子）夫婦が主な介護・看護の担い手となっている。

次に、回答者の配偶者（夫）が長男か否かに注目して父親の中心的な介護・看護者の分析を加えてみると、夫が「長男」の場合は「配偶者〔＝夫の母〕」（51.9%）、「長男（夫婦）」（32.4%）等、「長男以外」であっても「配偶者〔＝夫の母〕」（44.1%）、「長男（夫婦）」（30.3%）等の順に割合が高くなっている【図 6-1】。一方、母親の中心的な介護・看護者をみると、夫が「長男」の場合は「長男（夫婦）」（60.8%）、「配偶者〔＝夫の父〕」（12.3%）等、「長男以外」の場合は「長男（夫婦）」（47.5%）、「長男以外の息子（夫婦）」（20.6%）の順と長男で有無に関係なく「長男（夫婦）」の割合が高くなっている【図 6-2】。

さらに、回答者の配偶者（夫）の成人した女のきょうだいの有無に注目して父親の中心的な介護・看護者の分析を加えてみると、夫に女のきょうだいが「いた」場合は「配偶者〔＝夫の母〕」（46.1%）、「長男（夫婦）」（32.9%）等、「いなかった」場合は「配偶者〔＝夫の母〕」（59.9%）、「長男（夫婦）」（21.8%）等の順となっている【図 7-1】。一方、母親の中心的な介護・看護の担い手をみると、夫に女のきょうだいが「いた」場合は「長男（夫婦）」（54.9%）、「長男以外の息子（夫婦）」（12.5%）等、「いなかった」場合は「長男（夫婦）」（44.4%）、「長男以外の息子（夫婦）」（23.0%）等の順となっている【図 7-2】。

以上のことから、夫のきょうだいの続柄からみた配偶者（夫）の親の中心的な介護・看護者の特徴をまとめてみると、父親の場合は夫が「長男」で有無に関わらず約４～５割の「配偶者〔＝夫の母〕」が主な介護・看護の担い手であり、夫に女のきょうだいが「いた」場合でも「配偶者〔＝夫の母〕」が約４割、「長男（夫婦）」が約３割となっている。一方、母親の場合は「長男」で有無に関わらず約５～６割の「長男（夫婦）」が主な介護・看護の

図 6-1　配偶者は長男か否か×中心的な介護・看護者（配偶者の父親）

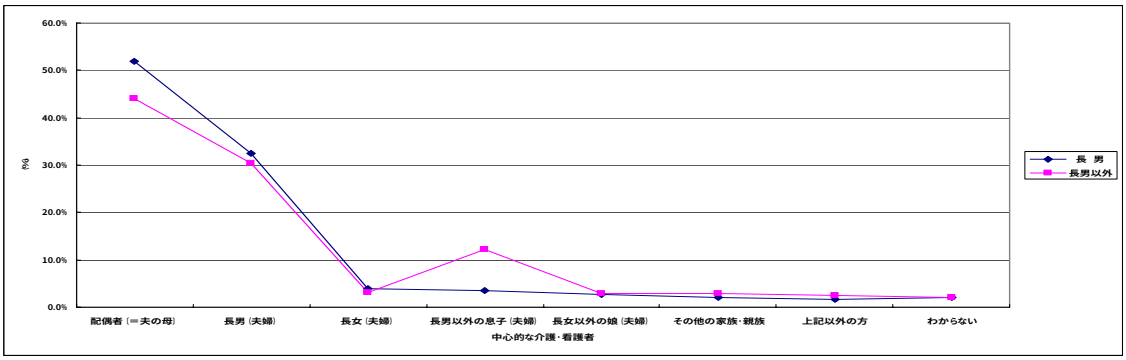


図 6-2　配偶者は長男か否か×中心的な介護・看護者（配偶者の母親）

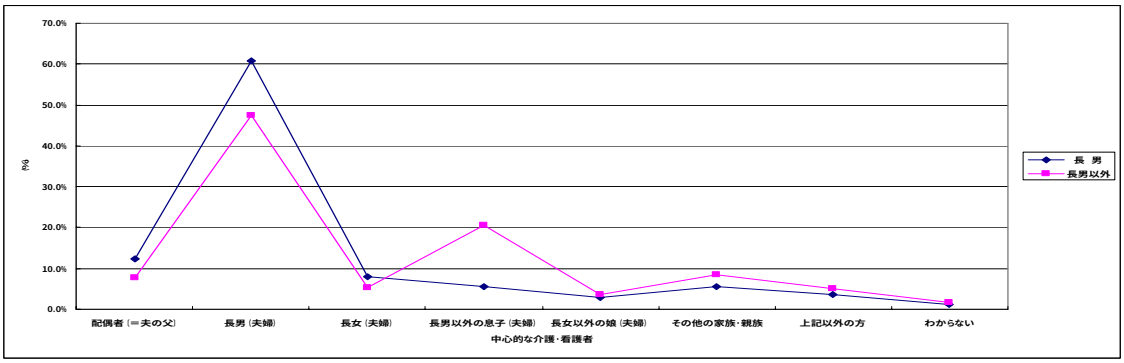


図 7-1　配偶者の女のきょうだい×中心的な介護・看護者（配偶者の父親）

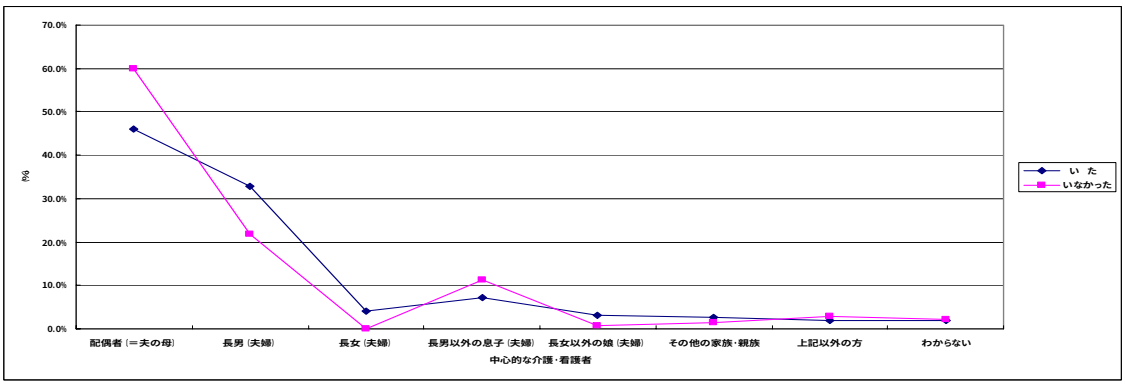


図 7-2　配偶者の女のきょうだい×中心的な介護・看護者（配偶者の母親）

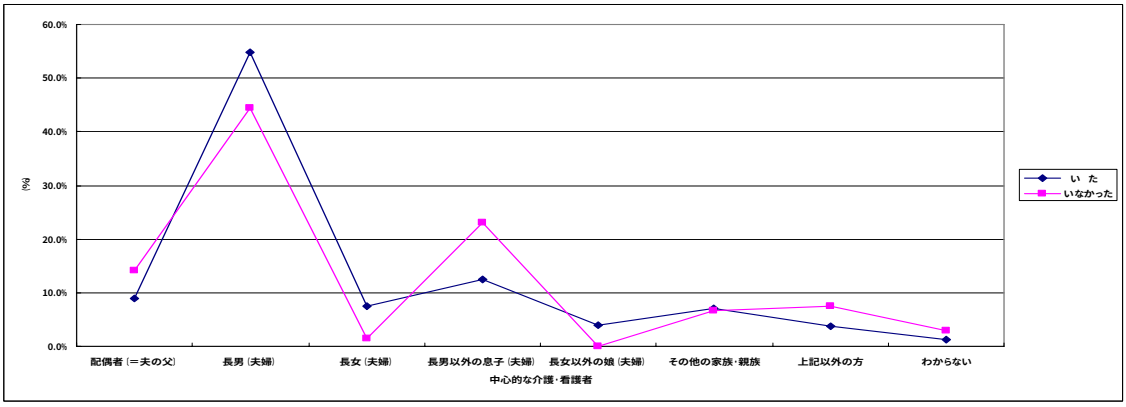


図 8-1　回答者出生コーホート（10 年階級）×中心的な介護・看護者（配偶者の父親）

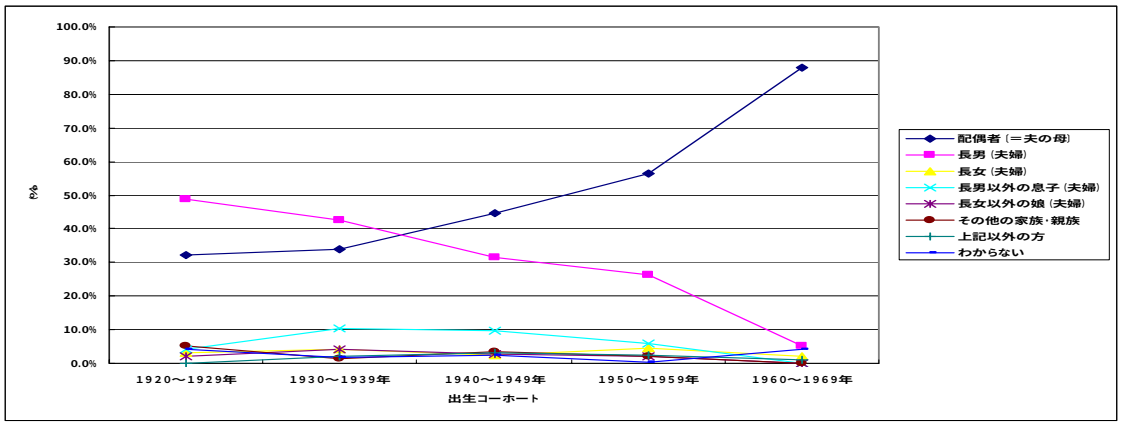
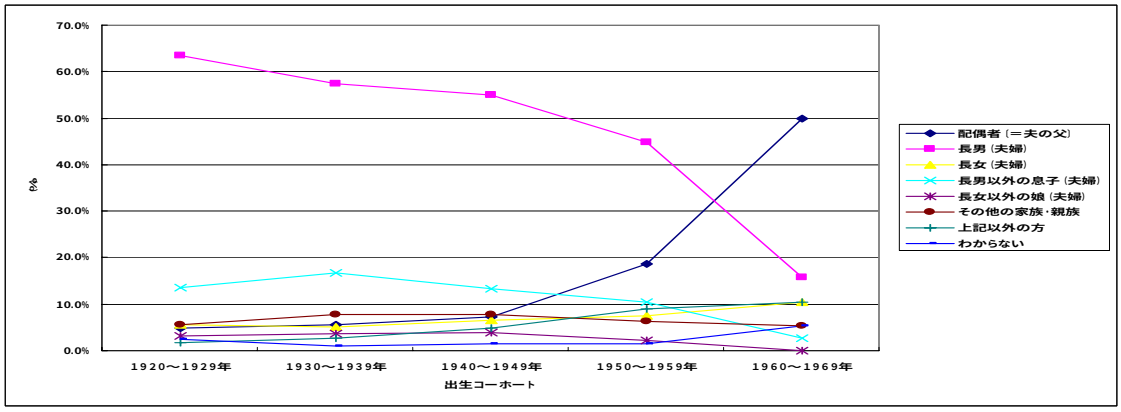


図 8-2　回答者出生コーホート（10 年階級）×中心的な介護・看護者（配偶者の母親）



〔出典〕図１・２は内閣府「高齢者介護に関する世論調査」に基づき作成

〔出典〕図３～８は「全国調査『戦後日本の家族の歩み』」に基づき作成

担い手である。また夫に女のきょうだいが「いた」場合は「長男（夫婦）」の約５割、女のきょうだいの「いなかった」場合でも「長男（夫婦）」の約４割と長男（夫婦）が主な介護・看護者といえる。これらの結果から、配偶者（夫）の父親の場合はきょうだいの有無に関係なく配偶者、母親の場合は子ども（長男夫婦）が中心的な介護・看護の担い手であることが浮き彫りになったといえる。

（２）出生コーホートにみる配偶者（夫）の父親・母親の中心的な介護・看護者

次に、出生コーホート（10 年階級）別に両親（夫）の中心的な介護・看護者の分析を加えてみると、父親の場合は「1960～69 年」（87.9%）、「1950～59 年」（56.6%）コーホートの約６～９割、「1940～49 年」（44.6%）コーホートの約４割が「配偶者〔＝あなたの母〕」となっている【図 8-1】。続いて「1920～29 年」（49.0%）、「1930～39 年」（42.5%）コーホートでは、約４～５割の「長男（夫婦）」が主な介護・看護の担い手となっている。一方、母親の場合は「1920～29 年」（63.5%）、「1930～39 年」（57.5%）、「1940～49 年」（55.0%）、「1950～59 年」（44.8%）コーホートの約４～６割が「長男（夫婦）」、続いて「1960～69 年」（50.0%）コーホートの約５割が「配偶者〔＝あなたの父〕」となっている【図 8-2】。

以上のことから、それぞれの親（夫）の中心的な介護・看護者の特徴をまとめてみると、

父親の場合は「1940～49 年」を起点としてそれ以降のコーホートは「配偶者〔＝夫の母〕」、それ以前のコーホートは「長男（夫婦）」と中心的な介護・看護者の続柄が徐々に変化している。また、母親の場合はどのコーホートにおいても「長男（夫婦）」が中心的な介護・看護の担い手となっているが、「1960～69 年」コーホートから徐々に「長男（夫婦）」から「配偶者〔＝あなたの父〕」へと中心に主な介護・看護の担い手が変化しているといえる。これらの結果から、配偶者の父親の場合は「長男（夫婦）」から「配偶者」中心へ、母親の場合は「長男（夫婦）」中心の介護・看護から徐々に「配偶者」へと変化する状況が浮き彫りになったといえる。

５．おわりに

これまでは、親の主な介護・看護者の状況についてきょうだいの続柄や出生コーホート別に検討を加えてきた。そこで以下では現代家族における高齢者介護の意識と実態の特徴についてまとめることにしたい。

まず、現在の高齢者介護に対する内閣府の意識調査の結果からは、家族の肉体的負担、精神的負担の軽減していくための外部機能を活用して、徐々に家族介護から公的介護へと移行していることが明らかとなった。とはいえ、実際に望む介護の担い手として、男性の場合は身近な「配偶者」、女性の場合は血縁関係にある「娘」であることから、高齢者介護の担い手としての女性像が浮き彫りとなったといえる。

次に、現在、実父母と義父母の４人の介護・看護を誰が担っているのかを、NFRJ-S01 調査の結果から分析してみると、回答者の父親及び夫の父親の介護・看護には、主に「配偶者」の約５～６割が関わっていた。一方、回答者の母親の介護・看護には「長男（夫婦）」の約３割、「長女（夫婦）」の約２割、夫の母親の介護・看護には「長男（夫婦）」の約５割が主な担い手であった。また、きょうだいの続柄にみた両親の中心的な介護・看護者の状況からは、回答者及び配偶者（夫）のきょうだいの続柄に関わりなく、回答者及び夫の父親の場合は「配偶者」、回答者及び夫の母親の場合は「長男（夫婦）」が中心的な介護・看護の担い手であることが明らかになったといえる。

さらに、本調査の結果をコーホート別に分析してみると、回答者の父親及び夫の父親の介護・看護ではいずれも「1940～49 年」コーホートを中心に「配偶者」が主な介護・看護の担い手であった。一方、回答者の母親の場合は「1950～59 年」コーホートから徐々に「長男（夫婦）」から「長女（夫婦）」、「長女（夫婦）」から「配偶者〔＝あなたの父〕」へ、夫の母親の場合はどのコーホートにおいても「長男（夫婦）」が中心的な介護・看護の担い手となっているが、「1960～69 年」コーホートから徐々に「長男（夫婦）」から「配偶者〔＝あなたの父〕」へと中心に主な介護・看護の担い手が変化していた。このように、若年コーホートへ移行するにつれて、介護・看護の担い手に変化がみられるようである。

以上の考察からも明らかなように、戦後の少子化、核家族化の影響に伴いきょうだい数が減少し親と別居する割合も高くなっている現状のなかで、実父・義父の介護・看護の場合は身近な「配偶者」である高齢者女性が担い手となっている。また、実母・義母の場合は、意識調査との違いがあるとはいえ、「娘」に変わる「長男（夫婦）」ここでは高齢者介護の担い手としての「嫁」の存在が浮き彫りとなったといえる。

このように、日本における高齢者介護は、私的介護から公的介護へと移行しているとは

いえ、現段階においても私的介護（特に女性）への依存度が強いように思われる。今後は、少子高齢化や核家族化の進行する現代の家族において、ますます親の介護・看護の問題が深刻化して行くであろう。そして、介護保険制度等を中心としたそれぞれのニーズに応じた高齢者福祉の施策の検討が重要な課題となるであろう。

注

１）高齢者介護研究会「2015 年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～」高齢者介護研究会報告書，2003 年

２）安達正嗣『高齢期家族の社会学』世界思想社，1999 年，PP.143-147

３）袖井孝子「高齢者ケアと家族～ケアはなぜ女性の役割なのか～」（社）日本家政学会編『変動する家族～子ども・ジェンダー・高齢者～』建帛社，1999 年，PP.163-164

４）清水浩昭「家族と扶養」清水浩昭・森謙二・岩上真珠・山田昌弘編『家族革命』弘文堂，2004 年，PP.201-202

５）大久保孝治・杉山圭子「サンドイッチ世代の困難」藤崎宏子編『親と子：交錯するライフコース』ミネルヴァ書房，2000 年

６）問 41 から回答者の両親が３か月以上の介護・看護を必要としたのかについてみると、父親の場合は「なかった」（63.6%）、「あった」（32.7%）、母親の場合は「なかった」（64.5%）、「あった」（28.6%）となっている。このように、本調査の結果からは、両親ともに要介護・看護経験の 「なかった」親の割合が約６割と高い傾向にある。

７）問 43 から配偶者の両親が３か月以上の介護・看護を必要としたのかについてみると、父親の場合は「なかった」（49.9%）、「あった」（31.3%）、母親の場合は「なかった」（55.2%）、「あった」（29.4%）となっている。このように、本調査の結果からは、両親ともに要介護･看護経験の「なかった」という親の割合が約５割以上を占めている。

文献

安達正嗣『高齢期家族の社会学』世界思想社，1999 年

大久保孝治・杉山圭子「サンドイッチ世代の困難」藤崎宏子編『親と子：交錯するライフコース』ミネルヴァ書房，2000 年

高齢者介護研究会「2015 年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～」高齢者介護研究会報告書，2003 年

厚生労働省監修『平成 16 年版　厚生労働白書』ぎょうせい,2004 年

清水浩昭「家族と扶養」清水浩昭・森謙二・岩上真珠・山田昌弘編『家族革命』弘文堂，2004 年

袖井孝子「高齢者ケアと家族～ケアはなぜ女性の役割なのか～」（社）日本家政学会編『変動する家族～子ども・ジェンダー・高齢者～』建帛社，1999 年

袖井孝子編著『少子化社会の家族と福祉～女性と高齢者の視点から』ミネルヴァ書房, 2004 年

内閣府「高齢者介護に関する世論調査」2003 年

内閣府編『平成 15 年版　高齢社会白書』ぎょうせい，2003 年

内閣府編『平成 16 年版　高齢社会白書』ぎょうせい，2004 年

森岡清美・望月嵩共著『新しい家族社会学』培風館，1997 年